

房山雲居寺石経と浄土三部經

藤 堂 恭 俊

はじめに

今般、中国仏教協会と本学との共同主催のもとに、佛敎大学四条センターで、海外初公開の房山雲居寺石経拓本展を開催するにあたり、中国仏教協会から派遣された林子青先生⁽¹⁾、黄炳章先生⁽²⁾らご一行四名をお迎えし、その上、午前の席では林先生からは「房山石経の概況と意義」、午後の席では、只今は黄先生から「発掘拓印・整理研究」に至るまでの貴重な学術講演を頂戴し、その上、私にお話をする機会を与えられた光栄に、感謝と感激で胸が一杯であります。中国の国宝である房山石経の拓本展示、および四名の先生がたの派遣にご尽力下さった中国仏教協会々長趙樸初先生、直接その任にあられた周紹良先生を始め、協会の諸先生にたいして甚深の謝意を表する次第であります。

房山雲居寺とその石刻經典については、夙に今は亡き塚本善隆先生を始めとする諸先生がたによって、昭和十（一九三五）年に、当時の東方文化研究所（京都）から、『房山雲居寺研究』⁽³⁾が刊行されていることはご周知のとおりであります。丁度その頃私は本学の前身、佛敎専門学校に在籍し、塚本先生から中国仏敎史の講義を拝聴しながら、興味にひかれるまま、自坊の書架から『房山雲居寺研究』をとりだし、図版を見てそれに関する論文を拝読した記憶が、走馬灯のように脳裡を去来します。執筆にあたられた長廣敏雄先生を除き、塚本善隆、水野清一、小川（貝塚）茂樹、

森鹿三らの諸先生がご存命であれば、今回の学術講演と拓本展開催を、どれほどか喜んで頂けるかと思うと、あついのが込みあがってきます。雲居寺は一九四二年、旧日本軍の砲火を受けて、あえなく灰燼に帰しましたが、只今、着々と進められている雲居寺の復興・再建に際し、『房山雲居寺研究』に収録されている写真、一山伽藍の配置図が、貴重な資料として役立っている、と聞くにつけて、このことを先亡諸先生にお伝えできれば、と思うばかりであります。

私は毎年、大正大学と本学の教職員や学生諸君を募って、中国浄土教の祖師がたの遺跡を北に南に、巡拝し研修をかさね、今年で七回訪中いたしています。その都度、房山石経の見学を中国仏教協会にご依頼していましたところ、一昨一九八五年、念願になって始めて憧れの地、雲居寺跡と雷音洞を見学することができ感激いたしました。さらに本年八月初旬、再度房山を訪れましたところ、雲居寺再建の作業が急速に進められている現状を目のあたりにして、中国仏教協会はもとより、北京市ならびに中国政府の施策にたいして、敬意と讃意を表した次第であります。

本学文学研究科に在籍中でありました石橋成康君（仏教学専攻）が、浄土宗の海外留学生として上海の復旦大学に留学中、二度にわたって房山を訪れ、中国仏教協会のご好意を頂いて、貴重な研究資料の写真撮影をお許し頂いたことを衷心よりお礼申し上げます。おかげをもちまして帰国後、その資料に基づいた研究成果を、一九八六年六月開かれた日本印度学仏教学会の席で「房山雲居寺について」と題して発表、さらに同年九月には浄土宗教学大会の席で「房山石経新出版若心経版本考」と題して発表いたしました。その成果は両学会の機関誌にそれぞれ掲載されたことを、関係者の一人として、ご好意を頂いた中国仏教協会の諸先生にご報告申し上げ、感謝の意を表したいと存じます。

日本に紹介された房山石経浄土三部経の拓本図版

前置きが長くなりましたが、私に与えられた課題「房山石経と浄土三部経」について、お話を進めたいと存じます

が、これにつきましても、中国仏教協会のご好意によって頂戴した資料に基づいて行うことを、最初に申しそえておきたいと思います。

中国政府は一九五六年から三年がかりで石経山に点在する九つの経洞と、雲居寺南塔付近の地下に貯蔵されていた総計一五、〇六〇におよぶ刻経石等のすべてを発掘し、拓本にとられました。このおびただしい数にのぼる刻経石のなかに含まれている浄土三部経は、私たち日本の仏教学人に対して、公的にどのような方法で伝えられ、知らされたでありますか。

その第一は、一九七八年四月、中国仏教協会から刊行された『房山雲居寺石経』に収められている石経の目録である「房山雲居寺石経簡目」(以下「簡目」と略称⁽⁵⁾)であります。この「簡目」には曹魏訳『無量寿経』と、その異訳の『平等覚経』と『大阿弥陀経』各一本、『觀無量寿仏経』二本、『阿弥陀経』三本とその異訳『称讃浄土経』の二本の外、浄土三部経ではありませんが、浄土正依の論である天親菩薩造『願生偈』と『無量寿経論』各一本が掲載されています。この「簡目」には『大宝積経』一二〇巻を掲載してありますから、『無量寿経』の異訳である『無量寿如来会』が、当然そのなかの第十七・十八巻(第五会)として含まれていることは申すまでもありません。そういったしますと、五存七欠といわれる『無量寿経』漢訳諸本のなか、ただ一つ趙宋代の法賢訳『大乘無量莊嚴経』だけが、この「簡目」に掲載されていないことになります。これらは目録のなかに記載された浄土三部経のことではありますが、その柘本の方はどうなっているかと申しますと、「簡目」を収録している『房山雲居寺石経』の図版のなかに、ただ一部だけ収録されています。それは唐刻『阿弥陀経』であり、しかも図版十八に『大通方広懺悔滅罪莊嚴経』とともに、その柘本が影印されています。したがって、私たちはこの影印をとおして唐刻の房山石経に接することができるわけであります。

その第二は、一九八〇年五月に刊行された中国仏教協会編・日中友好浄土宗協会出版になる『善導大師圓寂一千三百年記念集』(以下『善導記念集』と略称)に、次に申します拓本の影印が収められています。このなか遼刻の『無量寿経』を八枚(四十二頁から四十五頁。⁶³から⁶⁶に至る。刻経石四枚の面と背の拓本でありますので、合計八枚になるわけであります)、次に唐刻の『観無量寿仏経』を三枚(四十六・四十七頁。⁶⁷と⁶⁸であります。但し面の部分に続く経文を、刻経石の側面、つまり石の厚味の部分に刻した拓本が二枚あるべきところ、一枚しか掲載されていません。おそらく編集・印刷の行程において、あやまって四十八頁の⁶⁹唐刻『阿弥陀経』の拓本の左側に掲載したのでしょう。さらに唐刻の『阿弥陀経』一枚(四十八頁、⁶⁹)の外に、四十九頁から五十三頁にわたって『無量寿経論』⁽⁶⁾を収録しています。この外、一九八〇年六月と翌年の二月に刊行された『中国仏教の旅』第二巻と第五巻には、さきの『善導記念集』に収録された四点⁽⁷⁾を掲載しています。ともかく私たちは本物の拓本ではありませんが、これらの影印によって房山雲居寺石経の浄土三部経に接することができますのであります。この拓本影印は研究の資料となることは当然のことであります。寡聞ではありますが、藤田宏達先生は『観無量寿経講究』⁽⁸⁾(一九八五年刊)という著書のなかで、諸本を対照するために『善導記念集』に収録された影印をとりあげられています。

房山石経の浄土三部経

(1) 阿弥陀経

唐刻『阿弥陀経』 最初に阿弥陀経三本についてご紹介したいと存じます。「簡目」によりますと第八洞と第九洞、および洞外とに各一本宛所在すると明記されています。最初にとりあげますところの第八洞に貯蔵されている唐刻『阿弥陀経』は、タテ一五二センチ・ヨコ五九センチの石板のおもて、即ち面の全面に『阿弥陀経』と『往生呪

文』および刻経題記を刻んでいます。中国仏教協会によって編集された未定稿の『房山石経総目録』（以下『総録』と略称）には、この唐刻を則天武后の垂拱年間から長安年間、つまり六八五年から七〇四年の間に刻まれたと判定されています。さらに今回の「房山石経拓本展」の列品解説には、この唐刻を房山石経の刻経事業の創始者である静琬第四代の弟子、恵暹が雲居寺住職時代の刻経であると指摘されています。この刻経年代の判定は、唐刻の底本を考える上に大変重要なことであります。開元二八（七四〇）年王守泰記になる石経山頂の『石浮屠後記』によると、開元十八（七三〇）年に玄宗皇帝の妹にあたる金仙公主（六九一—七三三年）が帝王に、房山石刻大藏経の底本の提供・下賜を奏請したのに対して、「大唐新旧訳経四千余巻を賜った」のであります。この唐刻はそれよりも以前に、既にその刻経を完了しているのであります。このことは、この唐刻『阿弥陀経』の底本を考える上に心得て置かねばならない重要事項であり、智昇（生没年代不詳）が勅命を受けて著わした『開元釈教録』二十巻に録された權威ある欽定大藏経（一〇七六部五〇四八巻）本を底本としていないことを示しているのです。そういう点で「総録」に示されているこの唐刻に関する年代判定は見逃すことができないのであります。

さて、この唐刻『阿弥陀経』を『大正新脩大藏経』所収本『阿弥陀経』と比較して、異同をたしかめたいと思います。唐刻の初行には「仏説阿弥陀経」という経名を置いています。巻数、訳出王朝名、訳者名を刻むことなく経文を刻んでいます。序文の仏弟子名では「目乾連」の乾の字を鍵、「拘稀羅」の拘の字を俱、「周梨槃陀迦」の梨槃の二字を利般としていますので、宋元明三本、流布本の系統によっていることが知られます。さらに六方段直後の「示現当益」のところの「聞是經受持者及聞諸仏名者」を「聞是諸仏所説名及經名者」として置きますから、流布本によっている、と言ひ得るでしょう。流通分の最後は「歡喜信受」で終り、しめくくりとしての経名を置いていないのであります。ついで「歡喜信受」のあと一字分の空白を置いて『仏説阿弥陀呪』と経名を刻み、一字分の空白を置いて「那

謨菩提夜 那謨駄羅摩夜」にはじまる呪文を刻んでいます。さらに呪文を終わって一字分の空白を置いて「経主」、つまりこの『阿弥陀経』の石刻を発願した尼僧の名と刻経の目的を刻んでいます。その題記には、

瀛州任丘県比丘尼員業同学等敬造阿弥陀経方広二部普為法界父母

と刻しています。この瀛州の任丘県という地名は河北省の任邱県を指し、北緯三八度七分、東経一一六度一分に位置しています。刻経を発願した人は員業という比丘尼で、しかも一人で発願したのではなく、「同学等」と刻んでありますから複数であり、おそらくグループで刻経を発願しているのです。この刻経者代表である「員業」については調べが十分ではありませんので、いかなる人物であり、伝記の存否すら申し上げることができません。この比丘尼員業のグループによる刻経は『阿弥陀経』一経だけではありません。『阿弥陀経』を刻んだその刻経石の裏に『大通方広懺悔滅罪莊嚴成仏経』巻中を刻んでいますことは、題記によっても知ることができます。このように『阿弥陀経』と『大通方広経』とを表裏、つまり面と背に刻んでいることについて、昨日講演を頂いた牧田諦亮先生のお話によりますと、『阿弥陀経』というまぎれもない翻訳經典と、『大通方広経』という翻訳經典でない所謂疑經(4)を表裏に刻んでいることに注目され、唐時代における『阿弥陀経』の受容を知る上に重要なことである、という指摘をされたことを、申しそえて置きたいと存じます。さらに刻経の目的として「普為法界父母」と刻し、刻経の功德を廻向することを示しています。なお申し遅れましたが、この唐刻は経文の切れ目、切れ目に一字の空白を置いて、次の経文を刻んでいることを報告申し上げます。

明刻『阿弥陀経』 次は第六洞の明刻『阿弥陀経』について申し上げます。タテ三一センチ・ヨコ九六・五センチという横長の刻経石の面と背の両面に、二十字詰で面の部分には五十六行、背の部分には四十八行を費して『阿弥陀

經』を、ついで『抜一切業障根本得生淨土陀羅尼呪』を三行、さらに続いて刻經の意趣と発願者名を刻しています。經文の切れ目、切れ目には一字分の空白を置くことなく、ぎっしりつめて刻んでいます。

この明刻の初行には經名を置いています、卷数、訳出王朝名、訳者名を刻んでいません。序文の仏弟子名、すなわち「目乾連」等の固有名詞は、宋元明三本・流布本の系統に属していますが、「別願所得」のところの「一心不乱其人臨命終時」の「一心不乱」と其人臨命終時との間に、「專持名号以称名故諸罪消滅即是多善根福德因縁」という二十一字を加えていますから、『襄陽石刻阿彌陀經』に基づいていることが知られます。続いて六方段に入って東方世界の「不可思議功德」の功の字をもって面の部分を終り、徳の字から背の部分に移っています。六方段の「示現当益」のところの「聞是經受持者及聞諸仏名号」はそのままでありますので、流布本に基づいていないことが知られます。流通分は「歡喜信受作礼而去」で終り、次に改行して『仏説阿彌陀經』という經名をもって結んでいます。

さらに改行して『抜一切業障根本得生淨土陀羅尼呪』と經名を刻み、改行して「曩謨阿彌多婆夜多他伽多夜」の呪文を三行にわたって刻んでいます。この「陀羅尼呪」の陀羅尼の三字は、元明両本（高麗本・宋本ともに欠く）には神という字になっています。なお元明両本にはこの「神呪」に続いて、「若有善男子善女人能誦此呪者阿彌陀仏常住其頂日夜擁護無令怨家而得其便現世常得安隱臨命終時任運往生」の三十九字を記載していますが、この明刻にはそれを刻んでいないのであります。ついで最後に刻經の意趣と発願名を刻んでいますが、その題記は、

是日已過命亦隨滅如少水魚斯有何樂當勤精進如抹頭然但無常慎勿放逸

南無西方極樂世界三十六萬億一十一萬九千五百同名同号大慈大悲接引導師仏

山西潞安府 藩府書弁官 王 永寧 造

となっています。ここに潞安府という地名は山西省の南東部、河北省に接近した地点の長治を指し、北緯三六度一

分、東經一一三度一分のところであります。発願者の肩書が「書弁官」となっていますから、おそらく役所の書記をしていた人物で、その氏名は王永寧であります。彼は自分の仏教教養をちらかせながら、老境に入り、自分のいのちが日一日と減少して行くことを綴って、阿弥陀仏の引導を願うての刻經とみることができます。

清刻『阿弥陀經』 次に「簡目」にその所在を「洞外」と記されている『阿弥陀經』に移ることにいたします。ここに「洞外」と明示されていることは、刻經石の所在が石経山の経洞以外の場所であることを指しています。さきに申し上げた唐刻と明刻の『阿弥陀經』は石経山の経洞内に貯蔵されていたのに対して、この清刻の『阿弥陀經』は雲居寺の北塔のそばに安置されている経碑であります。北塔の四隅には小さな唐塔がありますが、その西南隅にある唐塔（開元十五年（727）年四月、范陽の鄭元泰建立。奥壁に三尊仏の浮彫⁽⁶⁾）の東側にこの経碑が立っているとのことであります。

この清刻『阿弥陀經』については、この会場にいられる中国仏教文化研究所副所長の姚長寿先生がわざわざ現地に出むいて撮影されたネガを送って頂きましたことを申しさえ、感謝の意を表したいと存じます。

さて、この経碑の刻經の部分はタテ一二四センチ・ヨコ七五センチであります。その上にタテ六〇センチからなる所謂碑額を有し、さらに刻經の部分の下にタテ四〇センチからなる碑座を有していますので、この経碑は実に二二四センチという堂々たる碑であります。この経碑の面の部分には『仏説五十三仏名三十五仏名經』が刻まれてありますから、清刻の『阿弥陀經』はその裏側、つまり背の部分に刻まれていることとなります。經文は六十七字詰の二十九行を費して刻まれ、巻首と巻末には「仏説阿弥陀經」と經名を置いています。經文の切れ目、切れ目に一字分の空白を設けることなく、ぎっしり詰めて刻んでいます。巻首の經名に続く巻数、訳出王朝名、訳者名を刻んでいません。特徴としては『襄陽石刻阿弥陀經』に基づく「專持名号」等の二十一字を入れていること、六方段直後の「示現当

益」のところは流布本ではなく、「聞是經受持者及聞諸仏名者」としてゐることを指摘することができます。經文は「作礼而去」で終り、經名を置いて結びとしています。

(2) 觀無量壽仏經

隋唐刻『觀無量壽仏經』 『觀無量壽經』の石刻には三本ありますが、はじめに第四洞に貯蔵されている隋唐刻についてふれたいと思います。この隋唐刻は「總錄」によりますと、隋末（六一〇年代）から唐の永徽年間（六五〇—六五五年）までの間に刻まれたと判定されています。隋唐刻は刻經石六枚を費していますが、最初の一枚から四枚までの下半分は剝落が甚しく、第五枚目はおそらく石板が破壊されたのでありましょう、上部五分の一度度しか残っていませんので、あとの五分の四は残っていないようであります。第六枚目は中央が剝落していますので、六枚いづれも完全に經文を読みとることはできません。午後の席でさきほどお話頂いた黄先生のご指摘を踏えて申しますと、剝落という破壊には人為的な破壊と自然風化による破壊があるようで、上部五分の一しか残っていない第五枚目はおそらく人為的破壊によって、残部の行くえがわからなくなったのではないのでしょうか。あとの五枚は黄先生が指摘されたように、「經洞の入口に近い經板は、水がしみ込み、風に吹かれ、雨に打たれ相互に粘り付いてしまつて、少し動かすと粉々に剝離する⁽⁴⁾」という自然の風化による破壊に属すといつてよいかと思ひます。さらには石の材質が洞外に置かれて風雨にさらされて千年を経過しても、文字をはっきり識別し得るような漢白玉石という最良質の石材でなかったからでもあります。この隋唐刻『觀無量壽仏經』の刻經石六枚のサイズは、次のように一定していないのであります。第一石は、タテ一五五センチ、ヨコ七一センチ、第二石はタテ一三〇センチ、ヨコ七一センチ、第三石はタテ一三五センチ、ヨコ七三センチ、第四石はタテ一四四センチ、ヨコ五八センチ、第五石はタテ三四センチ、ヨコ五

二センチ、第六石はタテ一四四センチ、ヨコ二八センチとなっています。

さて、六枚の刻経石の一枚一枚のそれぞれに、一經の経文のどこから、どこまでが刻まれているかを紹介したいと思います。第一石の巻首第一行目に「仏説無量寿觀經一卷」と經名とその巻数を刻み、二字分の空白をとって經文を刻みはじめ、二十六行を費していますが、第一石の下部と第二石の初行の上部が剝落していますのでよくわかりませんが、初觀の日想觀に続く第二水想觀のはじめの部分で第一石を終わっています。第二石はその初行の上部が剝落のため、よくわからないのですが、第二行目は第二水想觀の「一一光明八万四千色」から始まり、第二十六行目は第七華座觀の最後の部分、「若他觀者名為邪觀」から、さらに第八像想觀の始めの部分で第二石を終わっています。第三石は第八像想觀の「心想中是故汝等心想仏時」から始まって、次の第四面とのかかわりから第十一勢至觀の終りの方の「見大勢至菩薩是」までで終わっていることを知ることができます。この第三面は經文を刻むのに二十七行費しています。第四面は二十一行からなり、第十一勢至觀の「為觀大勢至色身相觀此菩薩者名第十一觀」から始まっていますが、このなか、流布本には「色身相」としている相の字を想とし、しかもそれに続く「觀此菩薩者」の五字を、「名第十一觀」のあとに置いているのです。そういった点でこの隋唐刻は流布本の系統に基づいていないことを示しています。この第四石の最終行は上品下生の「來迎汝見此事時即自見身坐金蓮」という經文以下が剝落していて、読みとることができません。第五石は上部の方が十九行、字数は多いところで十二字、少ないところで六字程度しか残っていない、所謂殘闕刻経石であります。そのなか、第二行目には上品下生の最後の經文であります「名上品下生」者上輩生「想」を見るすることができます。第十六行目には下品上生の「名聞三宝名」という經文を見ることが出来ます。このような点で、この第五石には上品中生から下品上生に至る經文しか残されていないことを知ることが出来るのであります。最後の第六石は下品下生の「業故墮惡道」という經文から始まって、最後は「歡喜礼仏而退」と

流通分の終りまでを刻んでいますが、経名を刻んでいないのであります。この第六石は行数にしてわずか十行しかないのですが、それであって首尾完結しているということができるのであります。この隋唐刻は経文の切れ目、切れ目に一字の空白を設けることなく、ぎっしり詰めて刻んでいます。さらに隋唐刻には題記がありません。

唐刻『観無量寿仏經』 次に第九洞に貯蔵されている唐刻の『観無量寿仏經』に移りたいと思います。この唐刻は一枚の石板の面と背、およびその刻経石左右両側の厚味の部分に経文を刻んでいます。したがって、面と背、左右の側面とはそのスペースに大きなひらきがありますが、ともかく四面に経文が刻まれているわけであります。この唐刻の面は経文が刻まれている上部には碑額があり、そこには「仏説観無量寿仏經一卷」の十字を、三字宛四行にわたって大きな字で刻んでいます。経名と巻数を中央に刻んだ碑額の左右両側には、それぞれ菩薩の坐像が陰刻されています。そのなか、向って左側の菩薩は合掌し、右側の菩薩は蓮台を持っていますので、おそらく観音・勢至の二菩薩であろうと思われます。さて刻経の部分は一七〇センチ・ヨコ六八センチで、面の部分は三十行、それに続く経文を刻んだ側面の部分は五行、ついで背の部分（面の碑額に当るころにも経文を刻んでいる）は三十行、それに続いて側面の部分は四行にわたって経文を刻んでいます。この刻経石にはタテに線をほどこしていますが、ヨコ線はほどこしてありません。そうした関係からか、一行の字詰は不揃であります。面背両面ともに下部に剝落があり、加えて写真による限り刻まれた文字が小さ過ぎて大変読み苦しく、『大正大藏經』所収本との比較を後日にゆずりたいと思いますが、はじめに申し上げましたように、幸い藤田宏達先生はこの唐刻を含めて多数の諸本を比較対照されていますので、一応そちらの方を参照頂ければ幸甚に存じます。

さて面の第一行目を「仏説観無量寿仏經」という経石をもって始めていますが、それに続けて巻数その他訳出に關

する事項を刻んでいるか、否か、写真ではよくわかりません。経文は第二行目から始まり、最終行は第七華座觀の最後の方の「当先作此妙花座」という経文をもって終っています。この経文に相当するところは、元明二本および流布本では「妙花座」の妙の字を欠いています。つまり唐刻の方が妙の一字多いわけであります。ついでその経文の続きの「想作此想時」から始まって、第九仏身觀文の「如百千億夜摩天」という経文までを刻経石の側面に刻み、さらに背の部分に移って、その続きの「閻浮提金色身」という経文から始まり、下品下生の終りの方の「觀世音大勢至以大悲音声即為其広説諸」の経文をもって、背の部分を終っています。この最終行の経文は元明二本および流布本に基づいていないことを示しています。ついで刻経面の側面に移って「法実相」の経文から始まり、最終行は「歡喜礼仏而退」、「仏説觀無量寿仏經一卷」で結んでいます。この唐刻は経文の切れ目に一字の空白を設けています。なお唐刻には題記はありません。

遼刻『觀無量寿仏經』 さらに第九洞に貯蔵されている遼刻の『觀無量寿仏經』について述べたいと存じます。さきほどまで紹介してきました石刻經典のすべては、刻経石の第一行目から刻経が始められていました。しかしこの遼刻はそうでないのです。と申しますのは、この刻経石の面の部分から背の部分にかけて刻されている『度一切諸仏境界智嚴經』の経文が終って、改行をしないでこの遼刻が刻まれているからであります。所謂連刻の形式をとっているのが、この遼刻『觀無量寿仏經』の特徴であります。そういう事情でありますからこの遼刻は、刻経石の背の部分（第一行目は、「度一切諸仏境界智嚴經一卷 豈 条第五 背」に続いて「字分の空白を置いて経文を始めている」の第二十七行目の第十二字目から経名、巻数を刻んでいるのです。そればかりではありませんで、「觀無量寿仏經 一卷」と刻んだあとに、「豈」という字を置き、続いて少し小さい字で「宋西域三藏量良耶舍訳」と刻んでいるのです。この「豈」の

字は、千字文の字をもちいて大藏經の帙の番号を刻んでいるのであります。私たちは既に、智昇の『開元釈教略出』第一の記述をとおして、『觀無量壽仏經』が「養」帙におさめられていることを周知しています。しかるに遼刻によりますれば『觀無量壽仏經』は「豈」帙におさめられているとありますから、同じ經典でありながら帙、經卷を損傷から防ぐために包み覆う外包の番号に相異があるということは、大藏經を異にすることを意味しているわけであります。そうしますと、『觀無量壽仏經』を「豈」帙におさめているのは、いかなる大藏經でありましょうか。今回の展示拓本中に、遼代の重熙十三（一〇四四）年に刻まれた『大宝積經』卷第三十一（No. 一六）がございます。それをご覧になりますと、經文を刻んだ上部の中央に「鳥」という字の刻まれているのに、お気づきになったことでありましょう。このことについて、さきほどお話を頂いた黄先生がご指摘になっていたように、「おそらく、この時から雲居寺が「契丹藏」の雕印本を入手し、それによって刻造の底本とした」といわれましたように、「豈」帙におさめられている『觀無量壽仏經』は契丹大藏經のなかに編入されていることを意味しているのであります。帙番号が經文を刻んだ上部の中央に位置しているのは「鳥」帙で重熙十三（一〇四四）年のことですが、その後帙番号の位置は変化いたしますが、この『觀無量壽仏經』が刻される大安四（一〇八八）年には既にその位置も定着化し、さきほど申し上げましたように、經名・卷数を刻んだ下に置かれるようになっていました。

さて、『度一切諸仏境界智嚴經』の經文に続いて、『觀無量壽仏經』を刻む刻經石は、総じて四面からなっていますが、そのサイズは一定ではありません。最初の刻經石（背の部分）はタテ一四五センチ・ヨコ六八センチで、七十二字詰の三十二行からなり、『觀無量壽仏經』はその第二十七行目の第十二字目から始められ、「禁母縁」の「未曾聞有無道害母王今為此殺逆之事汚」の經文で終わっています。ついで「刹利種臣不忍聞」の經文から第二枚目の刻經石面の部分に移って、第七華座觀の「皆応一一觀之」の經文までを七十四字詰の三十四行にわたって刻し、続く「一一花一

一葉」の経文から背の部分に移り、七十三字詰の三十四行を費して、上品中生の「至行者前讃言〔法子汝〕」の経文で終わっています。この刻経石はタテ一五〇センチ・ヨコ六六センチです。さらに第三枚目の刻経石の面の部分に移って「行大乘解第一義」の経文に始まり、「大歡喜礼仏而退 仏説觀無量寿仏經一卷 終」と刻し終り、ついで第二十七行目の五十五字目から「惟念法比丘乃從世饒王」という「後出阿弥陀仏偈經」の偈文を刻し、さらに第三十一行目の第五十八字目から「那謨菩薩夜」という「阿弥陀仏説呪」の咒文を、最終行の第三十三行目の第五十一字目をもって刻し終り、続いて小さい字で「若能如法受持決定得生弥陀仏国」という十四字をもって結んでいます。この刻経石はタテ一四五センチ・ヨコ六九センチであります。この遼刻は経文の切れ目、切れ目に一字の空白を設けないで、ぎっしり詰めて石板に刻みこんでいます。

(3) 無量寿經

遼刻無量寿經 房山雲居寺石經のなかに『阿弥陀經』と『觀無量寿經』が各三本ありますのに対して『無量寿經』は、石経山の第二洞に貯蔵されている一本、しかも遼時代の刻経石四枚からなる一本しか刻経されていないのであります。経文は刻経石の面と背の双方に刻まれています、石板のサイズは一定ではありません。しかも、それぞれ刻経石の上部が剝落していますので、一行の字詰をたしかめることができません。しかし、下部の経文を読みとることができ、経文のどこからどこまでを刻んでいるかを判断することはできます。第一石はタテ一四〇センチ・ヨコ七〇センチで、面の部分には三十三行にわたって経文を刻んでいます。その初行の上部は剝落のためわかりませんが、「条第十四 如是我聞一時仏住」というところからしか、読みとることができませんが、「法蔵頌讚」の「三昧智慧 威徳無侶」という偈文で終わっています。この偈文の続きは背の部分に刻まれることになっていますが、剝落の

ため初行の上部にいかなる漢字が刻まれていたかわかりません。やっと「念 諸仏法界 窮深尽奥」という偈文から読みとることが出来ます。そうして三十四行を費して、「常見無量不可」という第四十五住定見仏の願文の途中で終わっています。第二石はタテ一五〇センチ・ヨコ六八センチで、面の部分には三十一行にわたって経文を刻んでいます。その初行の上部は剝落のためわかりませんが、但しあとで申し上げますように、第三石の面の部分と背の部分との初行とを参照いたしますと、なにが刻んであるかを推測することが出来るわけであります。ともかく「思議一切諸仏」という経文を読みとることができ、第一石背の部分の「常見無量不可」に直結する経文であることに気づかれます。面の部分は「極楽依報」の「珊瑚為華瑪瑙為実」という経文で終わっていますが、第三十二行目に小さな字で「百十八字 □□」と刻経の字数を刻んでいます。ついで背の部分に移り、初行は例のように剝落によってわかりませんが、それでも「値茎茎相望」という経文から読みとることが出来ます。そうして第二十八行を、「如是諸仏各各安立無量衆生於」という経文をもって終り、次の第二十九行目には「仏正道」の三字を刻みこんだことでしょうが、剝落のためその三字を見ることはできませんが、「仏説無量寿経卷上」という八字は読みとることが出来ます。この経名と巻数のずっと下の方に、「当寺講経律論沙門 季香 校勘」と刻し、最終の第三十行には「□□節度使左金吾衛上將軍檢校大師知涿州軍事蕭 惟平 提点」と刻しています。これら刻経にかかわりのある僧俗の人たちについては、最後にかためて申し述べたいと存じます。

『無量寿経』の下巻は第三石の面の部分から始まっています。この第三石はタテ一五四センチ・ヨコ六七センチで、面の部分には三十三行を費して経文を刻んでいます。その初行の上部は剝落しているのでわかりませんが、それでも「蔵康僧鎧詛 面 条第十六 仏告阿難其有衆生生彼国者」というところから読みとることが出来ます。そうして「寄喻顯徳」の「摧滅嫉心不望（房山石経は「望」の字を「忘」としています）勝故」という経文で終わっています。背の

部分は三十三行を費して経文を刻していますが、その初行は例のように剝落によってわかりません。しかし「背」条第十六「求法心無厭足常欲広説」というところから読みとることができます。最終行は「五悪段」の第一悪の「寿命或長或短魂」という経文で終わっています。この第三石の面と背に、第一石に見ることができなかった各面の総字数を小さい字で最終行に刻しています。面の部分には「面計二千二百□十□字」、背の部分には「背計三千四百二十十字王詮書 何脩」と刻してあるのがそれであります。このなか、字数以外の人名については最後にまとめて申し述べたいと存じます。ついで第四石はタテ一四八センチ・ヨコ六六センチで、面の部分は三十二行にわたって経文を刻しています。その面の初行は上部に剝落があるにも拘らず、「経下巻 服 条第十七」というところから読みとることができ、それに続く経文が剝落のためわかりませんが、やっと「不得相離展転其中」の文から読みとることができます。最終の三十二行目は「天下和順日月清明」の経文で終わっています。さらに次行に小さい字で「面計二千三百二十十字 王詮書 邵佶」と刻まれてあります。さらに背部分は経文を二十九行にわたって刻んでいます。その初行は「風雨以時」の経文からしか読むことができません。それは申すまでもなく剝落のためなのです。最終の第二十九行目は「弥勒菩薩及十」という経文で終わっていますので、第三十行目には「方来諸菩薩衆 長老阿難諸大声聞一切大衆聞仏所説靡不歡喜」という二十六字と、「仏説無量寿経卷下」の八字とが刻されていたのでしょうが、剝落のためにそれらの経文を見ることができません。さらに第三十一行目には「□事蕭 平惟 提点 当寺校勘講経論沙門 季香」と刻し、次の行には小さな字で「皆計二千四十五字 王詮書」と刻しています。この遠刻『無量寿経』の下巻、つまり第四石の面の初行に大蔵経の帙番号であります「服」という字が置かれています。しかるに智昇の『開元釈教録略出』巻第一にはこの経を「乃」の帙に収めていますので、「服」という帙番号は契丹藏経のそれであると思われるのであります。

さてこの遼刻の『無量寿経』には刻経を発願した人の意趣を刻んでいません。しかし刻経にかかわった校勘者、監督者、経文を書写した人、それを石に刻した人、刻経字数などを刻んでいます。さらに先きに申しました遼刻『観無量寿仏経』に見られた刻経石の表面か・裏面かを示す「面」「背」、大蔵経の帙番号、あるいは何枚目の刻経石かを示す「条第□」を、この『無量寿経』に見ることが出来ます。そういった点で遼刻の『観無量寿仏経』よりも、ととのった形式を持つのが遼刻『無量寿経』であると考えることが出来ます。

さてこの『無量寿経』の刻経に際して校勘の役を勤めましたのは「季香」という僧侶で、しかも「講経律論沙門」と刻されていますから、経律論の三蔵に通じ、それらを講義していた講師であることがわかります。『房山石経題記彙編』(以下『彙編』と略称⁸⁰)、この会場の入口で販売していますが、この「石経展」に間にあうようにと配慮されて中国仏教協会からお持ち頂いた、上梓はやほやの図書であります。その『彙編』によりますと、実は昨晩ひろい読みしたのですが、この季香は「当寺前尚座講因明論上生経沙門季香校勘」(『大宝積経』卷一百一十六―条三〇九)とありますので、経律論三蔵以外に因明にも通じていたことを知ることが出来ます。さらに彼は「当寺」という二字によって寺院に所属する三蔵の講師であつたわけですが、どこの、いかなる固有名詞を持つ寺院に所属していたかわからないのであります。しかるに『放光般若波羅蜜経』巻第五(条七)、および条十五とに「石経寺講経論校勘沙門季香⁸¹」と記載していますので、まぎれもなく石経山雲居寺所属の講師であることが判明するのであります。季香が刻経に際して校勘した經典を、立ち読み式であります(『彙編』によってざっと調べてみましたが、さきほど申し上げました『放光般若経』の外に、『大宝積経』⁸²、『大方広三戒経』⁸³、『無量清浄平等覚経』⁸⁴、『阿閼佉国経』⁸⁵、『法鏡経』⁸⁶、『大乘十法経』⁸⁷をあげることが出来ます。それら季香が校勘した刻経石のなか、とくに『大宝積経』に限って、「清寧二(二〇五)年九月」の十一日と十日、九日と十八日という年月日が記入⁸⁸されてあります。

次に「蕭 惟平」という氏名の下に付せられている「提点」とは監督のことです。この『無量寿経』刻經に際して監督の任にあたった人であります。「清寧四(二〇六)年三月一日」と同じ年の「五月二十日」という年月日の入った題記に、蕭惟平の持つ最もくわしい肩書を見出すことができます。両者とも同じですので、お手もとの資料『四大部経成就碑記』の題記をご覧頂きますと、最後の方に次のように記載されてあります。

大契丹清寧四年三月一日記。

安国軍節度邢洛磁等州觀察処置等使崇祿大夫檢校太師左金吾衛上將軍使持節邢州諸軍事州邢刺史知涿州軍州事兼管内巡檢安撫屯田勦農等使兼御史大夫上柱国蘭陵郡開国公食邑三千二百戶食実封參伯貳拾戶蕭惟平

この蕭惟平の伝記は『遼史』には見出すことができませんが、興宗(一〇三一—一〇五四年)道宗(一〇五五—一一〇〇年)の時代、契丹の盛期に宋と境をなす最も重要な地方を統治し、興宗の刻經続行の旨を体して、その事業の監督の任にあたった人であろう、と塚本先生は指摘されています。今『彙編』を拾い読みいたしますと、蕭という姓を持つ人で、しかも蕭惟平と同じく「知涿州軍州事」(この「涿州」とは河北省の順天府固安県を指し、北緯三九度四分、東經百十六度三分に位置しています)の肩書を持つ人をあげることができます。重熙二十(一〇五一)年の刻經石『大宝積經』卷第十七(条第三二)に、「帰義軍節度使知涿州軍州事 蕭昌順」、重熙二十二(一〇五三)年の刻經石『大宝積經』卷第八十九(条第三五)に、「広州防禦使銀青崇祿大夫檢校司徒知涿州軍州事 蕭惟忠」、清寧六(一〇六〇)年の刻經石『文殊師利仏土嚴淨經』卷下(条第四)に、「建雄軍節度使金紫崇祿大夫檢校太師知涿州軍州事 蕭琬」というように、同姓の人物が刻經の提点を勤めているのです。おそらく一族の人たちではないでしょうか。

さらにこの經典の上下両卷に字数を刻んだ下の方に「王詮書 何脩」、あるいは「王詮書 邵佶」と刻してあります。そのなか、「王詮書」はこの『無量寿経』の經文を書写した能筆家の氏名であり、「何脩」と「邵佶」とは王詮に

よって書写された『無量寿經』の經文を石に刻んだ人の氏名であります。お手もとの資料『四大部經成就碑記』の初行の下の方をご覧頂きますと、「殿試進士趙 遵仁撰 郷貢進士 王 詮書」と読みとることが出来ますが、その中の王詮その人のようであります。『四大部經成就碑記』のような記念すべき碑に、趙遵仁が撰述した文章を書写し、石刻のための原書とすることが出来る能筆家であり、肩書に「郷貢進士」とあるように、地方長官によって推薦された進士であつたのです。彼は『彙編』によると、この『無量寿經』以外に、『大宝積經』、『大方広三戒經』、『無量清淨平等覺經』、『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』、『阿閼仏国經』、『文殊師利仏土嚴淨經』、『法鏡經』の各經文を書写していることが知られますが、その中、年代のあきらかなのは『大宝積經』条第二九七の重熙二十四年（二〇五五）四月二十二日、『同經』条第三一九の清寧二（二〇五六）年九月九日、『同經』卷第二百二十二 条第三三二の清寧二年九月十八日をあげることが出来ます。さらに經文を石に刻んだ人の氏名でありますが、第三石の背に「何脩」、第四石の表に「邵佶」という氏名を見出すことが出来ます。このなか、「何脩」なる人物を『彙編』上に拾い読みで探してみますが登場してきません。「僧可昭鑄」⁽⁴⁵⁾、「僧可役鑄」⁽⁴⁶⁾、あるいは「何閼鑄」⁽⁴⁷⁾、「何済」⁽⁴⁸⁾というのがあります。「何脩」ではないとしても、僧侶が經文を石に刻む作業をしたことを知らされたわけであります。次に「邵佶」という氏名について調べてみますと、『放光般若經』に「邵文佶」⁽⁴⁹⁾というのを見出すことが出来ますので、「邵佶」のフルネームを「邵文佶」というのであろうかと、首をかしげているのですが、はたしてどうでしょうか。その外、「邵」という姓を持つ人として「邵景」⁽⁵⁰⁾、「邵寿」⁽⁵¹⁾をあげておきたいと存じます。

このように校勘者、提点者、能筆家などについて考えてきたのでありますが、それらを踏まえてこの遼刻『無量寿經』の刻經の年代を想定いたしますと、道宗の清寧二年から四年（二〇五六―二〇五八）頃であると言い得ないでしょうか。

房山雲居寺石經の浄土三部經について所見を述べてまいりましたが、その刻經の底本としてあきらかにされたのは、遼刻の『観無量寿仏經』と『無量寿經』の二部三卷が、契丹藏經によっていることとあります。その他については明確なことは言い得ないとしても、金仙公主の要請によって「大唐新旧訳經四千余卷」の下賜よりも以前に刻成になったものとその後刻成したものとを区別して考える必要があるかと存じます。浄土三部經と『大正新脩大藏經』所収の該当經典の比較を、十分行わないままお話を進めましたことを申し訳なく存じますと共に、雑薄な内容を長時間にわたってご静聴頂いたことをお礼申し上げ、終らさせていただきます。どうも有難とうございました。

〔注〕

- (1) 中国仏教協會常務理事、中国仏教文化研究所研究員。『房山石經之研究』（『法音文庫、一九八七年九月刊』）には、林元白という名のもとに「房山石經〈称讚浄土仏撰受經〉簡介」という論文が収録されている。
- (2) 中国仏教圖書文物館副館長、房山雲居寺修復委員会顧問。「房山雲居寺石經」、「房山石經遼金兩代刻經概述」（以上は『房山石經之研究』に収録）。このなか「房山雲居寺石經」については、氣賀沢保規氏による訳文が、『仏教史学研究』第二九卷第二号に発表されている。
- (3) 『東方学報』京都第五冊副刊には、以下の諸氏の論稿が収録されている。塚本善隆「石經山雲居寺と石刻大藏經」（一―二四五頁）、長広敏雄「房山雲居寺増塔記」（二四六―二五八頁）、水野清一「房山雲居寺石塔記」（二五九―二八六頁）、小川茂樹「房山雲居寺石浮屠記銘考」（二八七―三六八頁）、森鹿三「房山地方の沿革地理」（三六九―三八二頁）、太田喜久雄「北支那の地勢と地質」（三八三―三九六頁）、「房山雲居寺碑目」（三九七―四〇七頁）、「房山雲居寺碑文選録」（四〇八―四二二頁）、森鹿三「房山西域雲居禅林志―附図解説」（四二二―四三〇頁）、遊支日記」（四三一―四四〇頁）。
- (4) 「房山雲居寺について」（『印度学仏教学研究』第三五卷第一号所収、「房山石經新出般若心經版本考」（『仏教論叢』第三一号所収）。
- (5) 九七―一四二頁。曹魏訳『無量寿經』とその異訳を九九頁、『観無量寿仏經』二本、『阿弥陀經』二本とその異訳二本を一〇五

頁、『無量寿経論』と『無量寿経優婆提舍願生偈』を一二二頁に収録している。さらに『大宝積経』は九九頁に収録している。

- (6) この『善導記念集』には遼刻『無量寿経論』と題して十四枚の拓本影印を収録している。しかしこの『論』の影印は第七枚目の第二十四行で終わっている。次行一行の空白を置いて以下は、『転法輪経優婆提舍翻訳之記』を掲載、続いて第八枚目の第十行目から第十四枚の最後の行にいたる間に、『転法輪経論』の本文を掲載している。

このように『無量寿経論』にかかわりのない『転法輪経論』を、なぜ『無量寿経論』の名のもとに掲載したのであるうか。それにはそれなりの理由のあつてのことである。それは、各刻経石ごとに本文の前の行に『無量寿経論』と刻し、その下に刻経石が第何枚目かを示す数字と、大蔵経の帙号とを刻してあるために、本文の内容を確認しないで、所謂ハシラの『無量寿経論』だけによつたため、このような不手際が生じたと思われる。

- (7) 『中国仏教の旅』は監修趙樸初・塚本善隆、編集中国仏教協会・日中友好仏教協会、発行美術出版美乃美である。第二巻には『阿弥陀経』一枚と『無量寿経論』三枚を五十五頁に収録。第五巻には『無量寿経論』六枚を一八二・一八三頁に、『無量寿経』四枚を一八四・一八五頁に、『観無量寿仏経』四枚を一八六・一八七頁に掲載している。

- (8) 『観無量寿経講究』の「附章『観無量寿経』の諸本対照表」には敦煌本・トルファン本・石経、中国・朝鮮・日本の版本と写本とを対照させ、その諸本対照表と共に、諸本の解説を行っている。この中、対照に使用された石経は、邢州安楽寺石経と房山雲居寺石経とであり、とくに後者の解説は四七―四八頁に記載されている。

- (9) 『中国房山石経拓本展』10頁、翻文一一頁。さらに解説には「唐刻 年月日無し（開元年間？）と記載され、『総録』よりも刻経の年代を新しくみている。年代の判定に変化があることに注目したい。

- (10) 『房山雲居寺研究』（『東方学報』京都第五冊副刊）の図版三七「開元二十八年王守泰題記及辛酉詩刻（石経山頂 開元九年石浮図外壁）、その活字おこしを三二二・三二三頁に掲載。

- (11) 金仙公主の奏請によつて下賜された「大唐新旧訳経四千余巻」が智昇による欽定大蔵経であつたこと、および巻数上の不一致について塚本善隆先生は、「契公主は、開元十八年、「大唐新旧訳経四千余巻」を雲居寺に於ける石経事業の経本として賜らんとを奏請した。此に「送経京崇福寺沙門 智昇」とある。長安崇福寺智昇は、勅を奉じて当時の大蔵経を定めるに至つた有名な『開元釈教録』二十巻の撰者であり、開元十八年は、実にこの目録の成りし年である。されば「大唐新旧訳経四千余巻」はこの新定の開元一切経であつたであらう。たゞ『開元録』に入蔵せる一切経が、五千四十八巻であること、合致せぬ。これは松本博士

も推察せらるゝやうに、元來「石經本」として送る經であるから、法華・維摩・金剛般若・涅槃等の、既に刻成れる諸經典を除いた為と解してもよからう。當時は大藏經が、書写によつて伝へられてゐた時代である。全藏を具備して送ることは、容易ならざることであるから、交付の必要なものを除くのも、ありさうなことである」と指摘している。〔房山雲居寺研究〕一六・一二七頁。

また小川茂樹先生は、「彼（送經にかかわつた智昇を指す）は同年勅命によつて『開元釈教錄』を著し、一切經の見在目録を作つた。さればこの文に見える新旧釈經とは、此の開元釈教錄の勅定經錄に著録せられた、新しきテキストの集成に外ならず、金仙公主の奏請は此の新經錄の完成を見て、それを基とした經典の下賜を願つたものと見做される」（『房山石浮圖記銘考』——『房山雲居寺石經』所収、三二四頁）と指摘し、さらに「金仙公主の奏請は開元十八年であるが、之を写した王守泰の記は開元十八年であつて、後の三僧の名（前文の「京師の僧智昇秀璋と寺僧玄法との三僧」を指す）と銜を連るのは、奏請によつて開始された經本送附その他の事業が二十八年頃に、漸く完了したからであらう」（三二六頁）と指摘している。

(12) 隋の開皇十四（五九四）年に編纂された長安大興善寺沙門法經等撰になる『衆經目錄』卷第二の「衆經疑惑」の項に合計二十一部三十卷の疑惑經典をあげる第十三番目に「大通方広經三卷」（『大正藏』五五・一二六・中）を掲載、ついで四年後に上進された費長房の『歷代三寶記』卷第十三に「大通方広經三卷」（割註）世注為疑」（『大正藏』四九・一二・中）と記載して、「大乘錄入藏目」（『大正藏藏』四九・一一五・上）中に掲載。ついで智昇の『開元釈教錄』卷第十八の「別錄中偽妄亂真錄」三百九十二部一千五十五卷中に、「方広滅罪成仏經三卷」（割註）亦云大通方広懺悔滅罪莊嚴成仏經 亦直云大通方広經」（『大正藏』五五・六七七・上）と掲載。牧田諦亮氏は「大通方広經管見」の中で「大通方広經」の「撰述の時期を、梁の天監前後から隋の開皇以前とするのが普通のものである」（『疑經研究』二九一頁）と指摘している。

なお『房山石經題記彙編』（二〇七頁）によると、この「大通方広經」に左記の題記のあることを記載している。

「筆色馬水逸樂院王馬七記陰額」 幽州薊縣左金吾衛尉府尉□考及見存慈親及合家内外□条上鐫弥勒一軀下鐫□竊以転輪菩薩常知生□明並曜五蘊皆空故得□經実百劫之津梁乃十□言罕測忽悲亡父早殞□力無救冥途爰託勝□部伏願以此功德□存慈母益壽遐□三災撫慧劍□二事幻化萬□鐫妙典於□衛侍上□押衙□（四・一二一）

(13) 『抜一切業障根本得生淨土神呪』（『大正藏』二・三五一・下）。なお、敦煌本には「誦此呪者阿弥陀仏常住其頂命終之後任運往生」（『大正藏』二・三四八・中）としている。

(14) 「是日已過 命則隨滅 如少水魚 斯有何樂」という文は、竺仏念訳『出曜經』卷第二「無常品」(大正藏四・六一六・中)、同卷第三「無常品」(大正藏四・六一二・中、同じく下)に記載されている偈文である。そうした意味において、発願者王永寧の仏教教養の一端を知ることができる。

(15) 水野精一稿「房山雲居寺石塔記」『房山雲居寺研究』二六一—二六二頁、図版二八。

(16) 黄炳章氏「房山石経における発掘・拓印と整理研究」『中国房山石経學術講演』發表要旨、一九八七年、佛教大学刊。原文一九頁・訳文二六頁。

(17) 『大正藏』五五・七二八・中。

(18) 石経山雷音洞外に所在する「清寧四(一〇五八)年三月一日記」という銘記を持つ「四大部経成就碑記」に、「自太平七年 至清寧三年中間 統鑄造到大般若經八十卷 計碑二百四十条。又鑄写到大宝積經一部 全一百二十卷 計碑三百六十条 以成四大部数也」(『房山雲居寺研究』一四二頁・下段)と刻されている。この文の前文に韓紹芳が涿州の牧として石経山に至り石経を調査したところ、正法念経七十卷(計碑二一〇条)、大涅槃經四十卷(計碑一二〇条)、大花嚴經八十卷(計碑二四〇条)、大般若經五百二十卷(計碑一五六〇条)と記しているが、ここに「大般若經八十卷」というのは五百二十卷の残部を刻経したことを意味し、ここに一部六百卷がそろったわけである。その完成に続いて大宝積經一百二十卷を刻経したので、大藏經を代表する涅槃、華嚴、般若、宝積の四部大乘經が完備するに至った。そういう点においてもこの『大宝積經』の刻成には歴史的意義を認めなければならぬ。

(19) 黄炳章氏前掲發表要旨(原文二二頁・訳文二八頁)。

(20) 『大正藏』五五・七二四・下。

(21) 「簡目」による。『房山石経題記彙編』の「諸経題記(遼金)」には「大安四年」という四字を掲載している。

(22) 北京図書館金石組・仏教図書館石経組編、一九八七年八月刊。

(23) 『彙編』三一八頁。

(24) 『同右』二九七頁。

(25) 『同右』三一七—三一九頁。

(26) 『同右』三一九頁。

- 27 『同右』三二〇頁。
- 28 『同右』三二一頁。
- 29 『同右』三二三頁。
- 30 『彙編』九月十一日（条三〇三）、九月十日（条三〇五）、秋八月二十一日（条三〇七）、以上三三八頁。九月九日（条三一九）、九月十八日（条三二二）以上三一九頁。
- 31 『四大部經成就碑記』（『房山雲居寺研究』四一三頁上一下段）。
- 32 『仏説無量清淨平等覺經』（『彙編』三二〇頁）。
- 33 『房山雲居寺研究』一六三頁。
- 34 『彙編』三二四頁。
- 35 『彙編』三一五頁。
- 36 『彙編』三二二頁。
- 37 『彙編』三一六—三一九頁。
- 38 『彙編』三一九頁。
- 39 『彙編』三二〇頁。
- 40 『彙編』三二一—三二二頁。
- 41 『彙編』三二二頁。
- 42 『彙編』三二二頁。
- 43 『阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經』卷上（『彙編』三二〇頁）。
- 44 『聖善住意天子所問經』卷下（『彙編』三二六頁）。
- 45 『放光般若經』卷第四（『彙編』二九七頁）、『大宝積經』卷第一百十五卷（『彙編』三二八頁）。
- 46 『仏説如（幻）三昧經』条第八（『彙編』三二六頁）。
- 47 『放光般若波羅蜜經』卷第十六、条第廿五（『彙編』二九七頁）。
- 48 『大宝積經』卷第八十六、条第二四三、卷第八十八、条第二四八（『彙編』三一四頁）。

61) 『大宝積經』卷第九十六、条第二六四(『彙編』三一五頁)、『仏説如(幻)三昧經』卷第一、条第七に「邵保寿」と記されているので、「邵寿」のフルネームを「邵保寿」というのであろうか。

この拙稿は学術講演のために用意した原稿ですが、当日は時間の関係で相当端折って発表いたしましたので、心残りを感じていました。当研究紀要の編集に当たっている深貝慈孝先生から投稿するようにお勧めを頂戴しましたので、註を加えて掲載させていただきます。

(一九八七年十二月記)